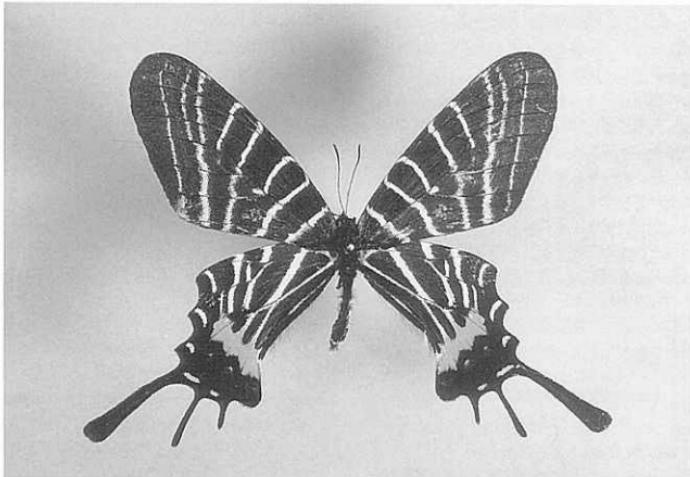


佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947 FAX 0952(25)7006



「照葉樹林の昆虫」展示コーナー展示品より

シナシボリアゲハ *Butanitis thaidina* (BLANCHARD), ♂, 中国四川省貢嘎 (ミニアコンガ) 山産

アゲハチョウ科シボリアゲハ属の蝶は、ヒマラヤ山脈東部から中国西部にかけて、シボリアゲハ、ブータンシボリアゲハ、ウンナンシボリアゲハ、シナシボリアゲハの4種が知られているにすぎません。

シボリアゲハの分布域が最も広くブータン、シッキム、アッサムなどのヒマラヤ山脈東部、ミャンマー、タイ北部、チベット東南部、中国西南部の四川省や雲南省などに生息しています。

ブータンシボリアゲハはブータンの限られた地域に局所的に産します。

ウンナンシボリアゲハは中国西南部の四川省や雲南省などに生息しています。

シナシボリアゲハは四川省、雲南省、陝西省などに生息しています。

いずれも、成虫は年1回の発生で、5~6月に出現し、3本の尾状突起があるのが特徴です。♂、♀はよく似ていて区別は難しく交尾器の詳細な検討が必要といわれています。

飛翔はゆるやかであるが、樹上を高く活発に飛翔し採集は困難と言われる。各種の花で吸蜜したり、地上で吸水する。

目 次

- 企画展展示の蝶より「シナシボリアゲハ」 表紙
- 調査ノート「音のかたち —浮立— 〈木・竹製楽器を中心に〉」 P 2~4
- 企画展記念講演要旨「中国南部の照葉樹林をたずねて」 P 5~8

調査ノート

音のかたち — 浮立 — — 木・竹製楽器を中心に —

佐賀県を代表する民俗芸能に「浮立」がある。県内に100数十種が確認されており、それは芸能により①面浮立・天舞浮立（踊浮立・狂言浮立）③天衡舞浮立（玄蕃一派流浮立）④その他（太鼓浮立・鉦浮立・行列浮立・獅子舞・荒踊り・大念佛など）に分類できる。①は鹿島市を中心として県西南部、②は武雄市を中心に県西北部、③は富士町から川副町を結ぶラインを中心に県中北部、④はある特定の市町村のみに伝承されていたり、県内全域に、ほばまんべんなく伝承されていたりするもので、①～④のようにはつきりした分布域を示してはいない。

さて、こうした浮立の分布状況を念頭に、浮立に用いられる楽器を材質および形態によって分類した場合、その両者の分布につ一つの共通点が生まれてくる。それがいったいどういうものなのか、以下まず浮立に用いられる楽器を材質および形態によって分類したうえで、のち浮立の分布状況と重ね合わせてみたい。

楽器の材質および形態による分類

まずここで対象とする浮立の楽器は、笛、ササラ、鉦太鼓、綾竹という、材質が木・竹製のもので、特に形態に特徴のあるものに限っている。

A 笛

材質別にみると、竹製笛と木製笛（アオキに限定される）とに分類できる。（例外として真籬製のものも確認されている・武雄市中野）竹製は形態別にみると、竹桿（丸竹）そのものを利用したもの（以下便宜上竹桿笛と呼ぶ）と、竹桿を何枚もの割竹に分割し、これを円筒状・多角形に組んで仕上げたもの（以下便宜上割竹笛と呼ぶ）とに大きく分類でき、これらはさらに指孔の数の違い、さらに大きさや若干の形態の違いなどにより細分類が可能である。木製は原則として笛本体の形態は1種類に限定される。但し、笛本体に施された真籬細工の有無をあげれば、2つに分類できる。（別表A参照）

以上の分類に従ってそれらの分布をみてみると、まず竹桿笛の分布は県北部を含む佐賀市以東の地域、つまり天衡舞浮立の分布する地域を中心に祇園祭や獅子舞が集中的に伝承される地域と重複していく。

これに対し、割竹笛の分布は武雄市と芦刈町を結ぶラインを北限とする県西南部地域、つまり面浮立が伝承される地域と重複していく。次に木製笛の分布は竹桿笛と割竹笛の分布に挟まれるかたちで県西北部一帯に広がっている。つまりこれは舞浮立の伝承される地域と重複することになる。

B ササラ

形態別（あるいは演奏方法による区分）にみると、ビンザサラとスリザサラに分類できる。ビンザサラとは長さ15cmほどの木片あるいは竹片を40～50枚つづりあわせ端上端を麻縄で結び、長さ30～40cmほどを1組にして左右両端に握手をつけ、これを両手で握って伸縮させ音を出すもの。一方スリザサラは、ササラと呼ばれる長さ30cmほどの茶筅状のもの（丸竹を利用）と、ササラと呼ばれる、長さ1mほどの丸竹の左右に鋸の歯状に刻みを入れたものからなり、両者を擦り合わせることで音を出すようになっている。さらにはビンザサラとスリザサラは、材質あるいは形態の違いにより細分類が可能である。（別表B参照）

以上の分類に従ってそれらの分布をみてみると、まずビンザサラの分布は佐賀市以東の地域、つまり先述の竹桿笛の分布と重なり、とくに田楽、天衡舞浮立、獅子舞という3つの芸能に限って使用されていることがわかる。これに対し、スリザサラの分布は武雄市と芦刈町を結ぶラインを北限とする県西南部地域（ただし鹿島市には分布していない）、つまり先述の割竹笛の分布と重なり、当然面浮立の伝承される地域との重複が指摘される。但し、天衡舞浮立（嚴木町天川）や踊浮立（伊万里市東山代）にも使用される例があり、佐賀県内においてスリザサラが面浮立専用の楽器とは言えない。

C 鉦太鼓

材質は檜製の薄板からなり、これを曲げ物状に円筒に組み（径20cm程度）本体としている。（農具のうち選別用具のフルイの金網をはずし、これを流用している例もみられる）内側に十字状に針金を渡し、これに鉦を通して、いわゆるタンバリンの形態にちかい。円筒に組まれた本体の両面を開いているものと、うち片面をふさいでしまっているものの2つに分類できるが、この形態の違いがそれぞれに違った分布域を示してはいないようである。（別表C参照）

鉦太鼓は舞浮立を中心に使用される楽器であり（舞浮立の一演目名でもある）、つまり分布は県西北部に集中している。

D 綾竹

形態は長さ30cm程度の円筒型、丸竹をそのまま利用している。竹筒中に小石などを入れ両先端をふさいだものと、両端に窓枠を開けそれぞれに1本の針金を渡し、これに鉢を通して仕上げたものの2つに分類できるが、この形態の違いがそれぞれに違った分布域を示してはいないようである。(別表D参照)

綾竹は鉢太鼓と同様、舞浮立を中心に使用される楽器であり(舞浮立の一演目名でもある)、分布も県西北部に集中している。

以上浮立に用いられる各種楽器を材質および形態の違いによって分類し、それらの示す分布と浮立の伝承される地域との関係をみてきた。(楽器の素材となる竹や木の植生と各種楽器の示す分布域との関係も考慮したが、植生に特徴がなくこの両者の関係は成立しないようである。)両者にどうしてこのような関係が生まれてきたのかの大きな問題が残る。材質および形態の違いによる分類は、いわば音色の

A 笛 (※指乱: 指でおさえ穴 竹笛: 竹の内側から得る皮膜)

材質	形態	浮立名	所在	笛参考	
				指孔数	その他の
竹 竹 の 利 用	a	米多浮立 白醍神社の田楽 太神楽	上峰町 佐賀市 神埼町	7	典型的な竹吹用の笛である
	b	海童神社奉納浮立	川副町	7	・大名竹と呼ばれる細長い長い竹を素材とする ・頭から出た枝がある程度残し、これを装飾とする
	c	天川浮立 徳須也紙団 唐津くんち	轟木町 北武多村 唐津市	6	・指孔以外に調整孔を持つ ・吹口(吹口)と指孔との間に孔を1つ開け、竹紙で塞いでいる
	a	面浮立	芦刈町	7	8角形
	b	育成の面浮立 鹿島市 有明町 白石町	7	9角形	
	c	面浮立	武雄市	7	10角形
木 木 の 利 用	a	天山神社奉納浮立	小城町	7	オキのみを素材とし、全体に漆を塗している
	b	府相浮立 真手野の舞浮立 広瀬浮立 大野浮立 水尾浮立	伊万里市 武雄市 轟木町 山内町 山内町	7	笛の頭・尾に真鍮製の装飾を施し、指孔間も真鍮製のリングで締められている
	a	中野の荒踊り	武雄市	7	笛本体が真鍮製

違いとして分類されたのと同じである。そうであれば浮立を構成する最も重要な要素である離子全体の調子、いわば、音程やリズムなどの観点から楽器相互の関係をみることが問題解決の糸口となるのかもしれない。特に浮立(離子)に用いられる各種楽器のうち、笛は唯一の旋律楽器であり、こうした視点は見逃せないと思う。ただ比較対象として離子を扱う場合、それを視覚化した楽譜が不可欠であるが、民俗芸能とは一般に「見よう見まね」で伝承されるものであり、こと音に関しては音譜に表現できない微妙な音域があり、非常に困難である。今回の執筆は調査の一阶段として楽器と浮立の関係においてその分布の事実を確認し、これを記したにすぎないが、このことを基礎としてさらに広い視野から調査を進めていきたい。

最後に本稿を執筆するにあたり金子信二氏(民俗芸能学会会員)をはじめ多くの方々にご指導ご教示いただきましたことに対し、深くお礼を申し上げます。
(芸芸員 山崎和文)

[左・次ページ表は、現時点で筆者が調査にあたった段階のものである]

	a 太神楽（神埼町） 長45.1 径2.1
	b 海童神社奉納浮立（川副町） 長66.7 径2.8 (部分)
	c 德須也紙團（北波多村） 長49.3 径1.5
	a 面浮立（芦刈町） 長42.5 径1.2
	b 面浮立（鹿島市） 長39.8 径1.4
	c 面浮立（武雄市） 長41.5 径1.7
	a 天山神社奉納浮立（小城町） 長38.2 径2.1
	b 大野浮立（山内町） 長43.7 径2.5
	a 中野の荒踊り（武雄市） 長40.2 径2.1

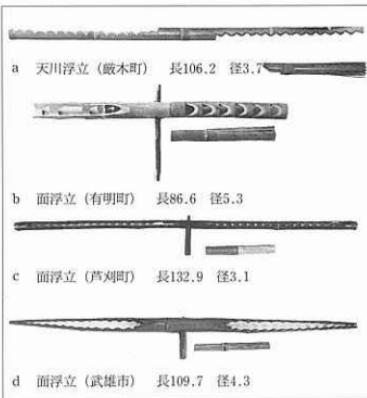
B ササラ

材質	形態	浮立名	所在	備考
木	a	白駒神社の田楽	佐賀市	文化4年(1807)銘 梗材
竹 ビンザサラ	b	小松浮立 米多浮立	佐賀市 上峰町 神埼町	竹片を2枚1組とし、竹片の内側どうし、あるいは外側どうしが触れ合うような工夫がなされている
	c	太神楽		
竹 スリザサラ	a	天川浮立	厳木町	取手無 面面—2面
	b	面浮立	有明町	取手有 面面—2面
	c	面浮立	芦刈町	取手有 面面—4面
	d	面浮立	武雄市	取手有 面面—4面



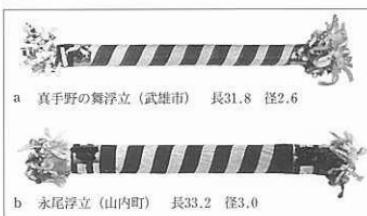
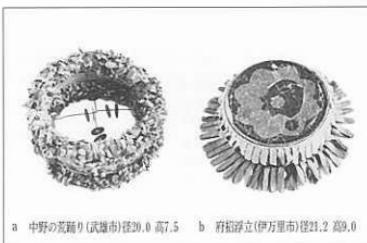
C 銭太鼓

材質	形態	浮立名	所在	備考
柳 円筒型	a	中野の荒踊り	武雄市	
	b	真手野の舞浮立 水尾浮立	武雄市 山内町	両面を開けている
	b	府招浮立	伊万里市	片面を塞いでいる



D 綾竹

材質	形態	浮立名	所在	備考
竹 丸筒型	a	真手野の舞浮立 中野の荒踊り	武雄市	
	b	府招浮立	伊万里市	竹筒中に小石などを入れ、両端に先端を塞いでいる
竹 丸筒型	b	永尾浮立 大野浮立	山内町	竹筒の両端に窓を作り、それそれぞれに1本の針金を渡し、これに銭を通しておる



博物館講座講演要旨

中国南部の照葉樹林をたずねて ふる里の生活を支えてきた照葉樹林

講師：佐賀大学助教授 宮脇博巳先生

平成3年9月19日から10月3日まで、香港、広州、長沙、昆明、西双版納、海南島を東アジア文化交流会の一員として訪れた。その成果の一端を、平成3年度博物館企画展「照葉樹林の生きものたち」にともない、記念講演会として、さる2月8日㈯に紹介頂いたものの要約である。

I 日本列島は北と南を結ぶグリーンロード

日本産の種子植物の数は、大井（1975）の日本植物誌によると約4000種で、そのうち約40%は日本の固有種である。日本の国土よりはるかに広いヨーロッパや北米大陸と比較しても、種類数では負けないほど、たくさんの植物が日本には生育している。日本の属する日華区系（北村 1957）は、地球上では湿润な熱帯地域を除くと、最も植物の種類（フロラ）の豊かな地域である（図1）。しかも、日華区系はヤマグルマ、カツラ、フサザクラなど原始的な特徴を持つ被子植物を多く産している。この様に日本のフロラの豊かな理由としては、1) アジア大陸の東岸として南北方向に細長い地形をもち、北上する黒潮暖流に洗われて雨量に恵まれている。2) その湿润のおかげで極寒が森林となる植生が連続と北はシベリアの寒帯から南は熱帯の東南アジアまで乾燥（砂漠）で途切れることなく続いている。3) その森林というグリーンロードを地質時代的な寒冷期や温暖期といった変動毎に植物（生物）が往来した。4) 日本は狭いなりに3000mを越える急峻な山脈や複雑な地形また地質に恵まれ、種によっては森や蛇紋岩地域など特別な隠れ場所を得られ、遺存的固有種を多数保有できた。5) ヨーロッパほどは氷河の影響を直接受けなかったといった点があげられる。ヨーロッパや北米は不幸にも東西に横たわる大山脈や砂漠の存在によって熱帯、亜熱帯の植物と接することが出来なかつたことが大きくフロラの量に影響したと考えられる。

つまり日本列島は、海の黒潮と対比すべき、北と南の陸を結ぶ森の列島、グリーンロードの列島である。

II 照葉樹林という林の実体は不明確だ

日本の温暖帯に発達する常緑広葉樹林に対して照葉樹林の名を最初に用いたのは吉良竜夫（1949）であった。そして、ヒマラヤから中国南部、日本にまたがる照葉樹林に発達した農耕複合文化を、中尾佐



図1. 北村（1957）による日華区系（綫縁域）

助（1966）が照葉樹林文化と呼んでから、照葉樹林の名は一躍有名になった。

ところが、照葉樹林はまとまった相観をもった林として、あたかも世界の植生の中に一つの植生単位として位置付けられているように思われるが、実際はその概念はおよそ日本だけの物であり、さらに日本の植物学者達の間でも常緑広葉樹林と呼ばれたり、暖温帯常緑広葉樹林と呼ばれたり、その名称や概念もまちまちであり、その定義は不明確である。

当然ではあるが、日本の照葉樹林構成樹種、そのものが雲南高原やヒマラヤに存在するとは限らない（例としてタブノキの分布図を上げる 図2）。



図2. タブノキの分布、村田（1988）より引用

また、それらの構成樹種の母集団は亜熱帯にあり、日本にあるものはそのうち耐寒性を獲得して北上した少数派と考えられている。つまり、日本の照葉樹林構成樹種は亜熱帯第三紀フロラ（6500万年～150万年前）起源の種群のうち耐寒性を最も獲得した特殊な集団である。その根拠として1) シイ属（*Castanopsis*）では、約60種が東南アジア東部の暖帯からマ

レーシアに分布するが、その内日本に知られるのは種レベルではスダジイとツブラジイだけである。タブノキ属 (*Machilus*) の種は小笠原を除けば日本にはタブノキとアオガシしか知らないが、熱帯および亜熱帯アジアには研究が追いつかないほど多くの種が存在する。同様にニッケイ属 (*Cinnamomum*) は沖縄を除けばヤブニッケイとマルバニッケイの2種しか知らないが熱帯および亜熱帯には約250種近くも知られている。2) シイヤタブノキなどの照葉樹林の分布の北限が、1月の平均気温0°Cの線とよく一致する。このことは冬の寒さが照葉樹林の分布を制限していると考えられる(図3)などの点があげられる。日本の照葉樹林に見られる種の分布は、台湾から中国南部にまたがる温暖帯にある照葉樹林で止まっていて、東南アジアやヒマラヤの山地にまで分布する種はほとんどない。たとえば、ツバキ属 (*Camellia*) は東南アジア、ヒマラヤ、中国、日本に150種(一説では中国だけで180種)あるとされているが、日本にはヤブツバキ、サザンカ、ヒメサザンカの3種類しかない。アオキ、サザンカなどは日本だけに分布する種である。スダジイ、ツブラジイは济州島を除けばやはり日本だけ

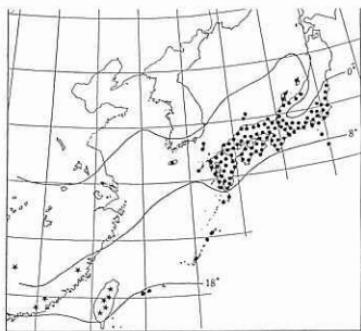


図3. シイの分布と最寒月(1月)の平均気温との関係。
村田(1977)より引用。

(●)はシイ、(★)はナガバシンノキの分布を示す。ナガバシンノキはシイに極めて近く、同種とされることもある。

ものである。ヒサカキは朝鮮半島南部から沖縄西表島まで、ヤブツバキ、ウラジロガシは台湾までシラカシ、シリブカガシ、イスノキやタブはさらに中国中南部まで、そして、アラカシはヒマラヤまで分布している。

一方、平成3年の植物分類学会の永益英敏氏の講演によれば、照葉樹林構成種と言われる日本産ハイノキ属のうち日本列島の種群は中国大陆のものに、琉球列島の種群は東南アジア熱帯高地のものに類縁があると述べている。つまり、構成樹種の起源や近縁性で照葉樹林を単純に定義するのも容易ではないようである。また、照葉樹林と亜熱帯林の境界決定の問題に付いてはデータさえ不足していて、暖温帯の照葉樹林と、その南方に連なる亜熱帯多雨林との関係は、まだよく分かっていないのが実状である。

実際は植物学者の間でも意見がバラバラであるにもかかわらず、かつて常緑広葉樹林などと呼ばれていたものが、最近の高等学校生物の教科書では「生物の集団と分布」という单元において、照葉樹林という用語が採用されている。そしてさらに教科書会社によってその定義、範囲はまちまちである。ちなみに、最新の文部省の学術用語集(1990)では照葉樹林の英訳は laurel forest(直訳すれば、ゲッケイジュの森)という地中海沿岸の硬葉樹林を連想させる意味不明の訳を当てている。

中尾佐助(1966)らのいう照葉樹林文化と言われる文化は絹、茶、ウルシ、柑橘類、酒、シソと言った共通の文化遺産をもつ文化としてよくまとまっているようである。たまたま未成熟であった植物学上の用語である照葉樹林をその文化的看板に採用したため、照葉樹林文化に引っ張られる形で「日本のふるいの森 照葉樹林」という言葉が先行して世間に広まつたのではないだろうかと考えている。

III 照葉樹林という用語に対するある提案

日本の暖温帯にある照葉樹林は、東南アジア、中国中南部の山地に多くの種を持つ「科」や「属」の最も北限に分布する「種」によって確かに構成されている。

しかし、日本の照葉樹林の構成種は東南アジアの山地に分布する種とは植物地理的にほぼ隔離しているようである。そこで、東南アジアの種群(東南アジア区系)とはなんらかの基準で区別する方がよいかも知れない。

もし、熱帯多雨林のように樹種の近縁性や起源を度外視して、ブラジルの熱帯多雨林、東南アジアの熱帯多雨林というふうに相観だけで照葉樹林を規定するなら、田川(1987)の分布図がむしろ妥当かも知れない(図4)。日本から中国中南部、ヒマラヤにまたがる暖温帯に見られる照葉樹林は、その組成からいえば、日華区系(北村 1957)の照葉樹林というべきだろう(田川 1988)。従って、照葉樹林とは「暖

温带多雨林気候帯に発達する森林タイプ、すなわち中型でやや硬く光沢のある常緑の葉をもち、限られた優占種による比較的なだらかな連続した林冠をもった林」を相観によってまとめられるものとし、日本から中国中南部、ヒマラヤにまたがる暖温帯に広がっている照葉樹林は、その種組成から「日華区系の照葉樹林」と考えられる。興味深いことに、村田(1988)に示されている日華区系の照葉樹林帯は、北村(1957)の日華区系G、C地域より、むしろ中



図4. 照葉樹林の分布、田川(1987)より引用。



図5. 中尾佐助(1966)による照葉樹林文化帯

尾(1966)のいう照葉樹林文化帯(図5)と不思議なほどよく一致している。

IV 偶然か、必然か植生帯と文化帯の重なり

ヒトとサルの中間的な性質をもった猿人が生存していたのは今より300万~400万年前の新生代第三紀鮮新世と言われる。一方、最も進化した植物群といわれる被子植物は今から1億年前の中生代白亜紀にすでに登場し、白亜紀後半には現在知られている「科」のほとんどがそろったと言われている。つまり、ヒトの生活活動と植生帯の形成がまったく異なる時間尺度でおこなわれていることになる。ところが、先に述べたように日本から中国中南部、ヒマラヤにまたがる暖温帯に広がっている照葉樹林は、中尾(1966)でいう照葉樹林文化地域とほぼ一致している。

そこで、この不思議な一致を時間を追って考えて

みると、

ア)類似した生物的な恵みの地域→偶然同一の人種が移動して行く→当然類似した文化が発展

イ)類似した生物的な恵みの地域→異なる人種の存在→必然的あるいは偶然的に類似した文化が発展した、という二通りの考え方があると思う。

私はア)・イ)どちらかの考え方が正しいと言えるような資料を持っていない。実際に雲南に行く前はどちらかと言うとイ)の考え方であり、一部の民族学者の意見には懷疑的であった。なぜなら、ア)の考えは余りに出来すぎた偶然を必要とする気がしたからである。しかし、数千キロも日本から離れた雲南高原(1000m以上の高地)にそれまでの中国の平地からは信じられないほど日本の植生に近い相観の森を仰ぎ、さらにそこに住む少数民族、たとえばアイニ族の人々の目を見るとそれまでに接してきた漢民族とは違う不思議な親近感を覚えた。

V ふる里の森は古代より我々の祖先の生活を支えてきた

わが国のいわゆる照葉樹林の主体をなす森林は、イスノキ林、タブ林、イチイガシ林、シラカシ林、ツクバネガシ林、ウラジロガシ林、スダジイ林、ツブラジイ林で、二次林もしくは極相林の前段階や土質の良くない地域ではアラカシ林が重要なメンバーになるとを考えられている。

佐賀県の山地帯においても、たとえば伊万里市の牧の山にはイスノキ、スダジイ、ツブラジイ、アラカシ、ヤブニッケイ、タブノキ、ウラジロガシ、ヤツツバキなどのいわゆる照葉樹林の構成樹種が見られる。

その内、広義にカシ類と言われる物の種子は「どんぐり」とも呼ばれている。古くは团栗(どんぐり)はクヌギの種子を指していたが、現在ではクヌギ、ナラ類、カシ類などの実を総称して「どんぐり」と呼んでいる。カシ類は、古代人の生活にとって特に欠かすことの出来ない有用な植物であった。なぜなら、カシ類の種子「どんぐり」は有用で、古代、またその後でも飢餓の時には、実を粉にし水にさらして済(タンニン)を除いて食用とされた。

さらに、種子は人だけでなく野生動物の重要な餌になった。わが国の照葉樹林をすみかとする大型哺乳動物といえば、ニホンザルとイノシシをあげなくてはならない。ニホンザルはさらに寒冷地への適応を得て、夏緑樹林帯へと分布を広げて種族を保っている。従って、イノシシはまさに照葉樹林帯を代表する大型哺乳動物と言える。

カシ類の材は、水に対する耐久力が弱く、また、カミキリムシの幼虫（テッポウムシ）が入ることが多いため虫穴がもとになって暗褐色の変色が起これ易いので、建築材や造船用には適さない。しかし、俗に堅木と呼ばれるように、重厚で粘り強いため、乾燥した材は狂いが少ないので、古くから農耕具、大工道具、餅つき杵の柄、手かんなの台、天秤の棒、荷車や牛車の車輪などに利用されてきた。各地の弥生時代の遺跡から出土する農耕具にもカシ類を使ったものが多い。その他、木材搬出用の木ぞり、芝居や相撲で用いる拍子木としても用いられてきた。特にシラカシの材は堅く、木刀や槍の柄に利用され、カシ類の中でもそれらの用途に最も適し、重宝な木であった。中でも九州産、特に肥後天草産のシラカシが優れていると言われている。また、シラカシの葉はラブロノイド、タンニン、トリテルペンなどを含み、結石溶解・形成抑制作用があるとして、民間薬で胆石症や腎結石に用いられた。さらに、シラカシの茎、枝、種子に含まれるタンニンは草木染の原料（褐色に染まる）としても利用された（安藤1990）。

木材も立派な資源であり、古くより人間の生活活動、文化にとって重要な要素であった。木材も現地調達の自給自足からやがて金属資源やガラス玉と同様、半製品として他の地域に搬入して利用、さらには政治的支配者の意向を反映した利用法が芽生えといふふうに、発達の歴史があったようである。山田（1991）は、縄文時代は「伐採者→製作者→使用者が同一人物（集団）で木材活用を共有し」、弥生時代は「伐採者→製作者→使用者が必ずしも同一人物（集団）ではなく、部分ごとに運搬した木材を活用した」と考えている。つまり、集落単位の消費から地縁的な集団間での消費へ、さらに地縁関係を越えた消費を想定している。さらに、マツの利用増加は人間にによる照葉樹林の破壊を想像させる。

ふる里の森は、吉野ヶ里の頃から現在まで我々の衣食住を支えてきたのである。

VI 照葉樹林帯に特異的に分布する地衣類があるか

私の専門は地衣類であるが、地衣類には周極要素の高山性の地衣類やブナ帯要素の地衣類は存在するようであるが、照葉樹林要素の地衣類は認め難い。日本列島の南部平地に見られる多くのものは熱帯、亜熱帯起源によるものようである。地衣類に関する限り特に照葉樹林帯と亜熱帯林帯、熱帶林帯を明確に区別する指標植物にはなり得ないようである。

地衣類の植物地理に付いては種分化の速度の違い

が重要な要因になりそうである。

VIII 日本人は中国好き、さらに「わが国独自」という言葉も好き

今回の中国南部旅行中に、巨大なタケの叢生をしばしば目にした。メコン川を下りした際には野生とともに見える竹林を川岸近くや谷筋だけでなく山の中腹、尾根筋にも見た。これらのタケは日本に見られる種類のように地下茎が先へ先へと広がらず、すぐ先端で立ち上がって、密集して立ち上がる性質を持つ熱帯系のタケであった。雲南省のタイ族の民家で昼食をごちそうになった時、大きな竹の輪切りをお櫃に使っているのに驚いた。タイ族、アイニ族、ミャオ族などの少数民族の村を訪れてみると建築材料、漁具、農具、食器と日本人以上に、彼らはタケを利用しているように思われた。

ところで、タケとササの区別は簡単で大きくなつても皮をかぶっているのはササで皮が脱落するのがタケである。

沖浦和光（1991）つまり岩波文庫「竹の民族誌、日本文化の深層を探る」で、沖浦氏はマダケを九州原産と考え、照葉樹林文化、中国文化と関連付けながら、日本文化と竹文化の結びつきを述べている。

一方、齊藤正二（1977）は古事記、日本書紀、壞風讃、万葉集に登場するタケはどうやらササであり、マダケは徹頭徹尾律令国家支配者の占有物であったと考えている。齊藤正二（1977）の意見によると8世紀頃に中國から輸入されたマダケは真に貴重な植物として律令宮廷の中だけで栽培され、貴族達の間だけで地下茎が分けられた。同時に中國詩のキーワードである「竹林」の神仙思想をも学習・受容する努力がなされたとしている。私の知る限り九州のどんな深山にも野生の竹林をみたことがない。また、吉野ヶ里の発掘でしられる七田忠昭氏のお話によると、弥生時代の遺跡から太くはっきりとタケといえる物は見たことはないとのことであった。地球全体が温暖だった時期はいざしらず、その以降に日本に野生のタケがあったとは考えにくい。したがって私は齊藤正二（1977）の意見を支持している。

（宮崎武夫記）

博物館・美術館報	第94号
発行年月日	平成4年2月10日
編 集	武 藤 佐久二
発 行	佐賀市城内1丁目15番23号
	佐 賀 県 立 博 物 館
	佐 賀 県 立 美 術 館
印 刷	御 大 同 印 刷